

ティムと ふしぎな小人たち

ヒルデ・ハイジンガー作
小川一枝訳



評論社

評論社の児童図書館・文学の部屋

商標登録番号 44-33814号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋

昭和47年1月20日 初版発行

¥ 690

著 者 ハ イ ジ ン ガ ー
訳 者 小 川 一 枝
発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 三 倉 印 刷
製本所 株式会社加藤製本

社 論 評 株式 会社 所 行 発

(〒101) 東京都千代田区神区神保町 2ノ16

電話代表 (265) 1 9 6 1

振替東京 7 2 9 4

(著者との了解により検印省略)

落丁・乱丁本は本社にてお取りかえいたします。

(A-1)

タイムとふしぎな小人たち

ヒルデ・ハイジンガー作 小川一枝訳

さし絵 リューデイガー・シュトローエ



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

TIM UND DIE UNSICHTBAREN

by

Hilde Heisinger

Illustrated by Rüdiger Stoye

Original German language edition published

by Verlag Friedrich Oetinger, Hamburg

Copyright © 1969 by Verlag Friedrich

Oetinger, Hamburg

Japanese translation rights arranged through

Charles E. Tuttle Co. Inc. Tokyo.

ティムは生涯、いろんなことのあつたあの秋の日のことを、けつして忘れないでしょう。

その前の日の夕方、泥炭採掘人（泥炭を掘ってそれ）（で生活している人）をしていいるおとうさんのパトリックは、空を見上げていました。「あしたは、一番どりといっしょに起きて、いちんち、沼で働くでしょう。天気の良いのを、りようしなくっちゃ。」

おとうさんは、したくをしてくれるように、おかあさんにたのみました。おかあさんはすぐさま、かまどに火を吹き起こし、お茶をわかす大きなやかんをかけました。

「氷砂糖をたくさん入れてね。ぼく、あれがすきなんだ。」と、ティムはたのみました。おとうさんとおかあさんは目くばせしました。

「ねえ、ティム。」と、おとうさんは少年の髪をやさしくなでていいました。「あしたの仕事は、おかあさんにも、わたしにも、とてもきついんだ。おまえは沼ではたいくつするだけだよ。ヒラモアーのおばあさんや、いとこのジョンのところに行った方が、ずっと楽しいよ。」おとうさんがこういうと、さいしょティムの顔はくもりました。それから、ぱっと明るく

なりました。一日じゅう、いとこのジョンといっしょにいられるなんて、なんてすてきなんだろう。ジョンはぼくに新しい船乗りの歌を教えてくれるかもしれないな。浜^{はま}で見つけためずらしい形の貝を見せてくれるかもしれないな。それから二人でいっしょに、あの小さな三本マストの帆船^{はんせん}を組み立てるんだ。もうひょっとしたら、風がおだやかなときには、入り江^えに浮かべられるくらい、できあがっているかもしれない。

ティムは一心にこんなことを考えていたので、返事をしませんでした。おかあさんは、ティムががっかりしてだまっているのだろうと思い、子どものこぶしほどもある氷砂糖^{ぎとう}をひとかけ、罐^{かん}から取り出して、ティムにやりました。そしてティムをなぐさめてやろうとしたとたん、ティムの顔がかがやいているのに気づきました。

「おやまあ、おまえはちっともがっかりなんかしていないんだね。半分やれば、じょうとうだったよ。」と、おかあさんはいって、とがめるように眉^{まゆ}をよせ、口をすぼめました。

ティムは、氷砂糖を返そうとしました。するとおとうさんが口をはさみました。「まあいいさ、かあさん。ティムのことだから、きつとだれかに分けてやるよ。」

よく朝、ほんとうにみんなは、一番どりといっしょに起きました。

おとうさんは、高い四輪の荷車にろばをつなぎました。ティムは力^{りき}んで顔をまっかにし、シャベルとかごを引きずってきて、ほめられ、すっかりうれしくなりました。

別れぎわにおとうさんは注意しました。「ヒラモアーへの道はわかってるね、ティム。ずっと荷車の通る道をはずれないで、泥炭堀にそって行くんだっ
でいたんぼりたろ？ 十字路であちこちわき見するんじゃないよ。まっすぐ行くんだよ。」

「夜でもぼく、道はわかるよ。目かくししていたって。」と、ティムは胸をはっていいました。「いったね、ぼうや。」と、おかあさんはきびしい調子でいいました。「でも、おそくなってから家に帰ろうとしたりしちゃだめだよ。」

「ティムはそんなつもりでいっ



たんじやないよ。」と、おとうさんがなだめました。「ちゃんと帰ってくるさ。はっかドロップの草を、ティムに取ってきてもらおうかね、かあさん。」

おかあさんの顔がほころびました。

「それはいい思いつきね。ヒラモアーほど、はっか草の香りのいいところは、アイルランドじゅうどこにもありませんからねえ。」おかあさんは、ティムの肩に袋をかけました。それからみんなは別れました。

荷車の輪が、ぎいぎいときしんで回りはじめました。ろばはふきげんそうに、「ヒヒーン」とないて、もう一度、うま屋のやわらかなヒースの寢床の方をふりかえりました。そしてティムがヒラモアーの方に向かって歩いて行くあいだ、ろばはぶっちょう面をして、えにしだの茂みのそばをかけぬけ、はや足で沼地に向かって走っていききました。

ティムは氷砂糖をひとかけ、まんぞくそうにしゃぶりました。ちよつとの間、まだティムは、きょう一日じゅう会えない両親のことを考えていました。でも、荷車のぎいぎいなる音が遠ざかってゆくと、風になびいている沼地の白いわたすげの草のように、心がうきうきしてきました。かれはいとこのジョンにならった海賊の歌を口笛で吹き、いろんな計画をたてました。実行するのと同じくらい、計画をたてるのもティムはすきだったのです。

しばらく歩いて、ティムは鼻をひくひくさせて立ちどまりました。よく知っているはっか草のにおいがぶーんとしてきたのです。しゃがんでさがすと、りん木の茂みのかげに、みず

みずしい緑の草のはえているところがあります。ティムはすぐさま、つみはじめました。ここで袋をいっぱいにして、茂みにかけておき、夕方帰りに、家へ持って帰るつもりだったのです。

ティムは一心につんでいたので、沼地へどんどん近づいているのに気づきませんでした。とつぜん、足もとの大地がずぶりと沈み、茶色の水がぶくぶくとわき上がりました。もしだれかの手が、ティムのえりもとをつかんでひきもどしてくれなかったら、かれはすんでのところで、まっさかさまに沼に落ちこんでしまうところでした。

あつという間に、ティムはまたもとどおり、かたい道の上に立っていました。左のすねは泥まみれになりましたが、そのほかにはべつに変わったところはありません。

ティムはどぎまぎしてふりかえり、お礼をいおうとしました。でもだあーれもいません。

ただ目の前を一羽、ひばりが飛び立って、さえずりながら空にまい上がっていったばかりです。まさか、ひばりがティムをすくってくれるはずがありません。いったいだれなんだろう？ ティムは道をあちこち見まわしました。ふしぎに思って手をかざしてみました。あたりはしんとしています。ただ二、三匹のみつばちが空中をぶんぶんうなっているだけです。

ティムははっとしました。だれが助けてくれたのか、思いあたったのです——と、背すじがぞくぞくっとしました——。

ヒラモアーのあの小人たち、きつとかれらにちがいありません。

「ありがとう！」と、ティムはもったいぶっていうと、ぴよこんとおじぎしました。

それから、ひとかけの氷砂糖ぎとうをポケットから取り出し、すぐ目につくように、それを平たひらい石の上におきました。

ティムはまた袋ふくろを肩かたにかけました。と、それはからっぽです。はっか草は一本のこらず、ぜんぶ落ちてしまいました。

それとも小人たちが、ここでもまたおせっかいをやいて、いたずらしたのでしょうか。

ティムは、おばあさんや、いとこのジョンと団だん練れんしていたとき、出た話を思い出しました。外がまだうす明るい間は、ランプの油をせつやくするので、かまどの火の前でゆり椅子いすをゆりながら聞いた話でした。ティムは二人の間の足台にじんどって、耳をしーんとすませていました。猫ねこのベッシーは、かまどのわきの、泥炭でいたん置き場の上にうずくまって、耳をびんとたて、気もちよさそうにのどをごろごろ鳴らしています。ベッシーが毛をなめはじめると、おばあさんはいつも「おや、小人たちがやってきたんだね。」と、いいます。そして立ちあがって、おわんにミルクをそそぎ、小人のお客さんたちをもてなすために、それをドアのそばに置くのでした。

ミルクはほんとうになくなるかしら？ ティムはいつも息をこらしたものです。何かが一ゆかつと床の上を歩いてきます。お台所のドアがギイッときしみました。何か影かげのようなものが、ティムの方に向かってやってきました……ほっとしたことに、それは猫ねこのベッシー

です。ベッシーときたら、わざわざミルク茶わんをしらべてみて、それがからになっていたと、ティムのところにいいにやってきたのです。

今、ティムは歩きながら、こんなことをすっかり思い出していました。

十字路でティムは、右も左もわき見せず、まっすぐに歩いて行きました。そこからもういくらもたたないうちに、おばあさんの家が見えてきました。おわりの方は走り出しました。おばあさんが、窓から身をのり出し、手をかざしているのが小さく見えたからです。

「ティムかい。よく来たね。」と、おばあさんはさけびました。「こんなにいいお天気だから、来るんじゃないかと思ったよ。きょうは泥炭^{でいたん}びよりだものね。ローズとカティも、両親が沼地に出かけたから、やってくるはずだよ。」

「ジョンはどこ？」と、ティムはおばあさんと握手^{あくしゅ}し、猫^{ねこ}をなでたあとできました。

「ジョンは海へ出ていったよ。きょうは漁^{りよう}にもいいひよりだからねえ。」と、おばあさんはためらいながらいいました。だってティムがどんなにがっかりするか、おばあさんにはわかっていたからです。そしてティムの気をまぎらせるために、さっそく、「どうして、魔法^{まほう}の長靴^{ぶつ}を（童話^{どうわ}にでてくる一足で七マイルもかける魔法の長靴のこと）片っぽうしかはいてこなかったんだね、ティム。」とききました。

ティムは足を見ました。さっきの泥^{どろ}がかさかさにかわいていて、ほんとうに、まるでまっ黒な長靴をはいているようでした。ティムは、ローズとカティのやってこないうちに、洗^{あら}っておこうと、ポンプのところに走って行きました。

二人の元気のいいおしゃべりがきこえてきたとき、ティムはまだ洗い終わっていませんでした。カティとローズは、しょっちゅう、新しい遊びを考えつきましたから、ティムもいつの間にか二人の上きげんにでんせんし、この日はもっともたいくつしないですみました。

みんなは、原っぱの水たまりに、木の皮で作った小舟を浮かべて歌いました。

「だあれ、だあれ、

海原^{うなばら}こーえて、

お舟をひくのは、だあれ。」

それからみんなで、あしの茎^{くき}を集めました。女の子たちはそれで小さなかごをあみ、うれた野ばらのいちごをいっぱいつまました。一つはおばあさんが、二つめはジョンが、三つめはティムがもらいました。ティムのはとくに小さくて、かわいらしいものでした。ティムは感心してそれを眺^{なが}め、ローズとカティにお礼をいいました。それからかごを海岸^{どて}の土手^{どて}においていました。

「これは小人たちにあげるんだ。」

「何かいいことをしてもらおうと思ってるんですよ。」と、カティはひやかし、ローズはとがめるようにいいました。「これ、記念のつもりであげたのよ。なのにティムったら、プレゼ



ントしちゃって、もう取り返せないわ。」

そこでティムは、はっか草をとっていたときのできごとを話してきかせようとなりました。そのとき、ちょうどおばあさんが、みんなの名まえをよぶのが聞こえました。おばあさんは、みんなに聞こえるように、おなべのふたを二つ、バンバン、と打ち鳴らしています。子どもたちは、おとなしく家に帰っていききました。

お台所のテーブルには、そば粉のはいった小さな袋と、卵が十個、それに大きなボールが置いてあります。

「ばんざあーい。そば粉のドーナツよ。」と、カティはうちょうてんになってさげびました。「おまけに、中にはベーコンのお窓もあけてあげるよ。ジョンはそれが大好物だからね。」と、おばあさんがいいました。「でもまだ漁から帰ってこないねえ。」と、おばあさんは心配そうな顔になって、つけくわえました。

それから、おっほん！ とせきばらいをし、めがねを鼻の上にずり上げると、油のしみたしおりのはさんであるお料理の本を開け、声を出して作り方を読みあげました。

分量を忘れたから、そんなことをしたのはありません。おばあさんはぜひとも、とくべつ大きな声で、作り方を読みあげたかったです。だって、「ねり粉を半時間ほど、ほっぺたをびしゃりとやる方向にかきまぜます。」と、いうところになると、ローズとカティがいつも声をあげて笑いだすからです。二人は今からもう、じっさいにほっぺたをびしゃりとや

ってもらって、ほったたをびしやりとやる方向とはどんな方向か、よく教えてもらおうと、待ちかまえています。ティムも、びしやり、とやってもらいました。

「でも、左ぎきのひとだったら、どうするの？」と、ティムがききました。

「そしたら、ねり粉はしっぱいするさ。」と、おばあさんは答えました。おばあさんは、そば粉をボールに入れ、塩に、卵、ヨーグルト、それに一つまみのマスカートをつけくわえました。四人がみんなでかわるがわる力いっぱいかきまぜて、ねり粉に泡あわができると、熱いフライパンの中で、ジュージュー音をたてているベーコンの上に流し入れました。

「さいしょのドーナツは、みんなも知ってるように、いつもジョンのものだよ。」と、おばあさんはいいました。「それにしても、ジョンはどこをほっついてるんだろかねえ？」おばあさんは、目の上の小さな灰色はいのブラシみたいなまゆ毛を、気づかわしげによせました。

ティムは出窓でまどのところによじ登りました。背せのびすると、ここからは海が見えます。でも、きょうは見えません。入り江えには、灰色の霧きりのもやがかかっています。出窓からふたたび下に降りる前、ティムは、ちょっとの間、考えこみました。

おばあさんに、霧のでていることをうつかりもらしたら、おばあさんは、ますますジョンのことを心配するだろうな。それにぼくも、帰り道、霧にまぎこまれないよう、さっそく家へ帰るようにいわれるだろう。いや、いや、だめだ。ティムは二番目のドーナツが焼けるまで、がんばっていいようと思いました。さいしょのが——ジョンのお菓子が——とてもうまく

焼けたのを見て、ティムの口の中にはつばがたまりました。

おばあさんは、さめないように、それをかまどのくぼみにおきました。それから戸口に行って、ドアを開けました。

「今、帰ってくれば、ほんとうにいいんだけど。」と、おばあさんはため息をつきました。とつぜん、おばあさんは、そわそわしだしました。「お天気が変わったね。」そういうと、ひとさし指をつばでしめらせ、手をつきだしました。「なごらしい。それにきょうの暖かいことったら。これは霧の出るしるしだよ。」

ティムの心配どおりになりました。おばあさんは、ティムをじつと見て、いいました。「ティム、さんねんだけど、すぐ家に帰らなくちゃいけないよ。ドーナツがあげられなくて、ごめんね。さいしょのは——わかってくれるね、ティム——いつもジョンの becoming のでね。」

ティムはたのむようにおばあさんを見つめました。「霧なんて、ぼく、へっちゃらさ。」とティムはいいました。「目をしばつても、ぼく道はわかるんだもん。」

「霧の中に行くのは、鬼ごっことはちがうんだよ。」とおばあさんは、ほん気で答えました。おばあさんは、ティムの肩に、おかあさんにあげるはっか草をいっばいつめておいた袋をかけてやり、ティムを戸口のところにおしやりました。

このとき、とんでもないことが起きました。猫のベッシーが、びよんと泥炭置き場からと

び降りたのです。そしてそのひょうしに、ジョンのドーナツがのせてあったお皿を、ひっくり返してしまったのです。ブリキのお皿は、さいしょ、かまどのタイルの上に落ち、それから床にはずんで、ぶんぶんうなるこまみたいにくるつ、とまわりました——うそじゃありません——、ほんとうに、ぶんぶんうなったのです。

カティとローズは、笑っていいのか、くやしがつていいのかわかりません。二人はお皿をじっとみつめました。おばあさんも、ティムも、うなりごまみたいにはねて歌っているお皿をみつめました。うっかりはねて、とんでもないことをひき起こした猫の方は、しつぽをぴんと立て、自分もいっしょに歌おうとするかのように、のどをごろごろならし、それからぴよんとおばあさんの肩にとびのりました。そしてそのまま、おばあさんの耳もとで、お皿がとまるまで、ごろごろいていました。ドーナツはつぶれもせず、お皿にのっかったままです。

「ベッシーったら、ひどいわ。」と、カティがいました。

「そうじゃないよ。」と、おばあさんはいって、猫の毛をなでました。「ベッシーが悪いんじゃないよ。小人たちが、たった今、ここにやってきたんだよ。小人たちの気もちが、つうじなかつたなんて、おばあさんはいわれたくないね。ティム、きょうはおまえに一番さいしょのドーナツをあげるよ。ジョンにはなくてね。」

「ぼくいいんだよ、おばあさん。」